

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	梅崎春生「桜島」と島尾敏雄「出孤島記」：水上特攻隊の描写を巡って
Author(s)	高木, 伸幸
Citation	国文学攷, 251 : 1 - 15
Issue Date	2021-12-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052810
Right	Copyright (c) 2021 by Author
Relation	



梅崎春生「桜島」と島尾敏雄「出孤島記」

——水上特攻隊の描写を巡って——

高 木 伸 幸

はじめに

梅崎春生と島尾敏雄。ともに終戦から間もない時期に文壇へ登場し、文学賞も幾つか受賞するなど、戦後の昭和文学を代表する作家として高い評価を与えられている。梅崎が島尾より数年だけ先にデビューし、前者は「第一次戦後派」、後者は「第二次戦後派」と称された。以来、梅崎が島尾より約二十年早く逝去を迎えるまで、二人は十数年の間、時代を共有していた。

しかし、梅崎春生と島尾敏雄は、並立または対比した形で取り上げられる関係では決してなかった。両作家におけるモチーフ、作風の類似性や相違点、さらには影響関係について具体的に踏み込んだ論考は、これまで皆無に等しい状況である。わずかに高田欣一が「島尾敏雄論」（昭和四十四年四月～七月『文芸首都』、五十年七月補筆）で、「島の果て」（昭和二十三年一月『VIKING』）や「ロング・

ロング・アゴウ」（昭和二十四年十一月『人間』）など、島尾の「初期作品群」に「梅崎春生のある種の小説とかなり近似した印象」を指摘しているものの、本文それ自体の比較検討には至っていない。²⁾

本論は両作家をそれぞれ「戦後派」として知らしめた小説、つまり梅崎春生の文壇デビュー作「桜島」（昭和二十一年九月『素直』）と島尾敏雄の戦後文学受賞作「出孤島記」（昭和二十四年十一月『文芸』）の比較検討を中心に考察を進める。前者が後者へ与えた影響をより具体的な形で明らかにし、これまで併せて論じられてはこなかった二人の作家の位置関係を探る端緒としたい。

—

「桜島」はタイトルに見るごとく、九州南端の〈桜島〉に設置された海軍基地を主要舞台としている。昭和二十年七月初、鹿児島
の坊津基地に配置されていた主人公の「私」が桜島基地へ転勤とな

る場面から物語は始まる。「私」がその地で八月十五日を迎えるまでを描く。梅崎春生は「私」と同じく海軍の桜島基地で終戦を迎えた³。登場人物などにフィクション的な要素を多く含んでいるものの、作者の戦争体験を反映させた中編と言える⁴。

「出孤島記」は「北部南西諸島」の一孤島に設けられた海軍基地が舞台。主人公「私」は九箇月前から同基地に派遣されていた。物語の現在は昭和二十年八月十三日に始まり、翌十四日の朝までを描く。島尾敏雄は十九年十一月より奄美加計呂麻島の海軍基地に赴き、その地で終戦を迎えた⁵。本作も作者自身の戦争体験を反映させた私小説的要素の濃い中編である。「出孤島記」の続編にあたる「出発は遂に訪れず」(昭和三十七年九月『群像』)では、八月十四日の朝から翌日の終戦までを描いている。

つまり梅崎春生の「桜島」は〈桜島〉を、島尾敏雄の「出孤島記」は加計呂麻島をモデルにした「孤島」を、どちらも南方(鹿児島県)の「島」にある海軍基地を舞台としている。作者自身の戦争体験、終戦体験に基づきながら、一人称の語りを通して大戦末期の軍隊生活を描いている。大きな枠組みで捉えれば、「桜島」も、「出孤島記」も、ともに敗色が濃厚な中で、決して避けられない(と思われていた)「死」と向かい合い、思いがけず終戦を迎えた(死を免れた)軍人の内面について、私小説風に掘り下げた作品と言える。

先に触れた通り、これまで二つの小説を具体的に比較検証した論

考は現れていない。しかし右に見るごとく、「桜島」と「出孤島記」は、その舞台設定やモチーフ、私小説的な作家の創作方法において、実は相通ずる要素を多く含んでいる。その証拠として、両作品の先行論には、「特殊な限界状況の中の生」を描いた小説とか、「極限状況の物語」とか、それぞれ大変似通った評言が用いられている⁷。また遠丸立は「戦争文学」を四つに分類する中で、「桜島」と「出孤島記」(「出発は遂に訪れず」の三作について、「広義の意味での記録」であり、特に「戦争を主題にしたいわば『私小説』」として、同じ分類に収めている(『戦後派』の戦争文学)、昭和四十八年八月『国文学解釈と鑑賞』⁸)。

高田欣一の指摘も、これらの考察と同じ方向にあらう。批評や研究の場で併せて取り上げられずとも、「桜島」と「出孤島記」に対して、その類似性を感じている読者は多いのではないか。

細かな部分に目を向ければ、両作品とも広島への原爆投下が主人公らに通知され、その数日後から三日間ほど敵機の襲来が見られなくなったエピソードを記している。特に敵機の来ない三日間について、「桜島」では「大挙行動する整備の状態」として、「出孤島記」では「ひどく不吉な「向う側の計画」として、つまりどちらの主人公もそれが敵側の策略によるものと解釈している。「桜島」も、「出孤島記」も、同じ大戦末期の海軍基地が舞台であるから、これらの一致は当然であらう。だが、二作品とも作者それぞれの経験を映し

出し、当時の海軍軍人が置かれていた状況、特に心理面を掘り下げた小説であることを、これら細部の表現より確かめられるのである。

さらに二つの小説には、それぞれ次のような場面も見られる。

「桜島」では、「私」が基地内の「見張所」から「双眼鏡」を通して「横合いの谷間」にある「百姓家」を眺める。「どこか、遠い所に、田か畠を持っているらしくて、毎日、その夫婦は鎌など持って出かけて行く」。「私」は見張所から、「海の向う」にある鹿児島市の、空襲で「黒く焼け焦れ」、「廢墟」となった様子も眺めている。

「出孤島記」においては、「私」が基地内の「番兵塔のある岩盤の上から望遠鏡を出して」「岬の鼻への途中に、一軒だけぼつんとある人家」を眺める。その一軒家に住む「初老の夫婦」が「豚に餌をやり、畠を耕」すなど、「余念なく動き廻って」いる様子を見ている。「私」は「望遠鏡」を通して、空襲によって破壊され、「廢墟」となった「海峡の向う」の町の様子も眺めている。

極めて類似した二つの場面であり、後者が前者の影響下に存する可能性もあろう。

なお「出孤島記」では、「私」が島の娘Nと恋愛関係にあり、「即時待機」の最中にも逢瀬を重ねる姿を描いている。よく知られているように、島尾敏雄とミホ夫人の結婚以前、加計呂麻島での関係に基づく。「出孤島記」はその側面に注目すれば、ただなる戦争小説でなく、広義の恋愛小説とも言い得る。「桜島」には、そうした要

素を見ることはできない。

しかし「桜島」は冒頭部において、「私」が「坊津郵便局の女事務員と仲良くなった」ことに言及し、坊津から桜島へ移動する際には、「私」が妓楼にて、片耳の無い「妓」と一夜を過^①している。「桜島」も、「出孤島記」も、「限界状況」「極限状況」の中、条件は異なりつつも主人公が女性との関係に救いを求めている。そうした設定により、戦時下の男性心理の一端を捉えている点では、やはり重なるものが存しているよう。

二

梅崎春生と島尾敏雄の交友関係を確かめつつ、前者から後者への影響について、「桜島」と「出孤島記」以外にも目を配りながら考えてみたい。

梅崎春生と島尾敏雄が、特に親密であったとの情報は認められない。梅崎も、島尾も、二人の交流に関わる文章は、管見の範囲では全く残していない。^②

しかし梅崎春生と島尾敏雄が疎遠であったかと言えば、決してそうではない。両作家はむしろ十分すぎるくらい接点を持っていた。

まず梅崎と島尾はともに昭和二十三年六月、『近代文学』に同人として加わっている。次いで梅崎と島尾はともに昭和二十三年十二月、『序曲』創刊に際し同人として参加している。『序曲』は一号で

終焉した同人誌であるが、その唯一の創刊号において、梅崎は座談会「小説の表現について」に出席し、島尾は短編小説「葉」を寄稿している。さらに『新日本文学』を発行する新日本文学会に梅崎は昭和二十三年六月に加入し、島尾は二十七年三月に加わっている。^⑩

梅崎春生と島尾敏雄は、ともに「戦後派」と評され、文壇に登場した作家であった。つまり同じ文学グループに属すると見做されており、だからこそ同じ三つの同人誌に加わっていた。その結果として、お互いの作品には意識せずとも数多く目を通し、それ相応に意識し合う関係にあったと見て差し支えない。

両作家の小説に見られる細かな表現について、少し具体的に比較してみよう。

島尾敏雄は短編「唐草」（昭和二十四年二月『個性』）の中で、主人公「彼」の視界に現れる「持病の発作」について書き、それを「眼華」と称している。^⑪短編「旅は妻子を連れて」（昭和二十七年二月『改造』）や長編「魚雷艇学生」（昭和六十年八月、新潮社）でも、その「眼華」を取り上げている。島尾は小川国夫との対談で、それが自身の持病であり、「眼華」との名称は「何かで読んだ」と説明している。^⑫

この「唐草」等に描かれた「眼華」とは、おそらくその症状から、正しくは「閃輝性暗点」と呼ばれる病であろう。作中に記されたその名称は、作者の発言通り、他の文学作品等を参考につけたものと言えよう。

ここで梅崎春生の作品に目を向けると、短編「蜆」（昭和二十二年十二月『文学会議』）に次のような一文が存している。

俺は布団の中で眼を堅く閉じ、瞼の裏に咲乱れる眼花をじっと追っていた。

中編「日の果て」（昭和二十二年九月『思索』）にも、「眼花が暗く入り乱れた」との一節が見られる。「蜆」も、「日の果て」も、「唐草」から一年前に刊行された作品集『日の果て』（昭和二十三年二月、思索社）に収録されている。

島尾敏雄が、これら梅崎作品を最初のきっかけに「眼華」との名称を思いついたと考えるのは短絡的であろう。島尾は先の小川国夫との対談で、かつて吉本隆明から「（「眼華」という熟語が）漱石の何かにある」と指摘されたことに言及し、「そうだったかもしれない」と語っている。漱石の漢詩「函山雜詠」（明治二十三年九月）には「眼華」でなく、「眼花」との表現が見られ、杜甫の漢詩や島崎藤村の小説にも「眼花」は用いられている。^⑬さらに岩波文庫『良寛詩集』（昭和八年五月、大島花束・原田龍平訳注）に収録された無題の漢詩には、表記も同じ「眼華」が使われている。^⑭島尾も「蜆」や「日の果て」より先に、おそらくそれらを目にしていたであろう。

しかし、島尾敏雄はその上で、やはり梅崎春生の作品からも影響を受けていたと言えそうである。

梅崎春生の「蜆」では、「真面目な会社員」として「人から貰う

側よりやる方になりたい」と考え、喜びもなく善行に努める「男」(「俺」)に対して、語り手「僕」が「お前も相当な偽者」だと呼びかけている。右に挙げた「眼花」は、「男」が「喜びを伴わぬ善」は「擬態」だと考え直す際に記されている。

対して島尾敏雄の「唐草」は、性への恐れを抱き、勉強にも手がつかない中学生の「彼」を主人公に据え、「に、せ者の彼」「に、せもの」の僕」と称している。「眼華」は、その「彼」の内面と併せて描かれるのである。また「唐草」に「擬態」との表現は見られないが、「唐草」から間もない時期に書かれた短編「アスファルトと蜘蛛の子ら」(昭和二十四年七月『近代文学』)を初め、多くの島尾作品で「擬態」という熟語が使用されているのである。

さらに梅崎春生には短編「賈の季節」(昭和二十二年十一月『日本小説』)、島尾敏雄には長編『賈学生』(昭和二十五年十二月書き下ろし、河出書房)という、ともにタイトルに「賈」の表記を含めた小説が、およそ三年の間を置いて存している。

「偽者」(「にせもの」と「擬態」は、他にも梅崎と島尾の作品に共通して多く認められる表現、モチーフでもある。これらが偶然の一致と考えるのは、むしろ不自然であろう。

ちなみに昭和二十年代末に至ると、梅崎春生は、「戦後派」に就いて文壇に登場した「第三の新人」の兄貴分とも目されるようになってきた。島尾敏雄も、やはり同じ時期から「第三の新人」に属する作家

とも捉えられるようになった。梅崎も、島尾も、「第三の新人」と称される作家たちと親しい関係にあり、両作家とも戦争文学からより私小説的・日常的な作風へ重点を移していったが故である。¹⁹⁾このことから、二人の作家が基本的な方向において、実は重なり合うモチーフと感性の持主であることが裏付けられよう。

以上のごとく梅崎春生と島尾敏雄は、十分近い関係にある作家同士であった。特に島尾から見て、梅崎は「島」の海軍基地で終戦を迎える類似した体験を持ちながら、少しだけ先んじて文壇に登場した先輩作家であった。島尾は梅崎作品に対して決して無関心でなく、少なくとも看過できない存在と捉えていたはずである。「出狐島記」は、島尾のそのような梅崎文学への関心、ことに「桜島」の影響下にあったと判断されるのである。

しかし島尾敏雄は後年、インタビュー録「戦後の文学を語る―第五回」(昭和五十一年六月『三田文学』、聞き手・岩松研吉郎)で、梅崎春生の作品に対して「あまり読めない」と言い、「桜島」も読んではずですけども、ほとんど印象が残っていません」と話している。その理由として、自身が書評を書いた梅崎の長編「砂時計」(昭和二十九年八月〜三十年七月『群像』)に触れつつ、梅崎作品の「軽み」「ユーモア」が「苦手」だと説明している。

この島尾敏雄の発言について、少なくとも「桜島」に対して額面通り受け取る必要はあるまい。「桜島」は梅崎の文壇デビュー作で

あり、後に一部の梅崎作品に見られた「軽み」「ユーモア」がまだ表れていないからである。それとはむしろ対極の、島尾好みの生真面目な作風とさ言い得る。にも拘らず「桜島」について、そのように語っているのは、何か理由があるからであろう。島尾の「桜島」に対する関心が必ずしも肯定的なそれではなく、どちらかと言えば否定的で、反撥する要素も含んでいたためではないか。

「桜島」と「出孤島記」の関係について、相違点に目を向けながら再考してみたい。

三

既に記した通り「桜島」と「出孤島記」では、どちらも海軍基地を舞台としている。しかし主人公がその中で受け持つ役職、立場は同じでない。「桜島」の「私」は通信科所属の「暗号員」であり、応召されて海軍に入った「兵曹」(下士官)である。「出孤島記」の「私」は「自殺艇乗組員」(水上特攻隊員)であり、学徒出身の士官として「隊長」の立場にある。こういった両作品の主人公に関わる設定は、もちろん梅崎春生と島尾敏雄の海軍における経験を反映している。梅崎は昭和十九年六月に応召され、翌年五月に海軍二等兵曹となった²¹。島尾は十八年十月、海軍予備学生を志願し、翌年五月に少尉に任官。十月には水上特攻隊である第十八震洋隊の指揮官となった²²。

島尾敏雄は梅崎春生の「桜島」に初めて出会った際、大枠においてはその主人公に関わる設定に自らを重ね、共感を催されつつも、同時に細かな部分で自分との違いを感じたであろう。

「桜島」と「出孤島記」について、主人公が置かれた立場を巡って如何なる表現の違いが認められるか、少し詳しく確かめてみたい。例えば「桜島」では、見張所の「男」が、「特攻隊、あれはひどいですね」と口にした上で、「私」に向かって「一語一語おさえつけるように」、次の通り語っている。

「木曾義仲、あれが牛に松明つけて敵陣に放したでしょう。あの牛、特攻隊があれですね。それを思うと、私はほんとに特攻隊の若者が可哀そうですよ。何にも知らずに死んで行く——」
「男」はさらに「滅亡の美しさ」を語り、「廢墟というものは、実に美しい」と付け足している。双眼鏡で「私」が百姓家を眺める場面は、この直後である。

また「桜島」では、別の場面において、「私」が特攻隊に使用される古ぼけた練習機を目にし、「その機に搭乗している若い飛行士のことを想像」する。その上で、「私」の回想が以下のように詳述される。

坊津の基地にいた時、水上特攻隊員を見たことがある。(中略) 国民学校の前に茶店風の家があって、その前に縁台を置き、二三人の特攻隊員が腰かけ、酒をのんでいた。二十歳前後の若

者である。白い絹のマフラーが、変に野暮ったく見えた。皆、皮膚のざらざらした、そして荒んだ表情をしていた。その中の一人は、何か猥雑な調子で流行歌を甲高い声で歌っていた。何か言っているのは笑い合うその声に、何とも言えないいやな響きがあった。／＼（これが、特攻隊員か）／＼丁度、色気付いた田舎の青年の感じであった。わざと帽子を阿弥陀にかぶったり、白いマフラーを伊達者らしく纏えば纏うほど、泥臭く野暮に見えた。（中略）／＼私の胸に湧き上って来たのは、悲しみとも憤りともつかぬ感情であった。（中略）欣然と死に赴くということだが、必ずしも透明な心情や環境で行われることでないことは想像は出来たが、しかし眼のあたりに見た此の風景は、何か嫌悪すべき体臭に満ちていた。基地隊の方に向かって、うなだれて私は帰りながら、美しく生きよう、死ぬ時は悔ない死に方をしよう、その事のみを思いつめていた。――

に身を置きながら、その精神（引用者注、「体当りで行く」こと）が判らんのか」と語っていることなどから確認できる。しかし「桜島」では、これらを除いて、特攻隊員への詳しい記述はなく、特に桜島基地の場面は、そこに居るはずの特攻隊員が一度も顔を見せないまま終わっている。また数少ない描写の中で、「坊津の基地」におけるそれは、梅崎春生が特攻隊員を批判しているかのようでもある^③。もちろん、梅崎は特攻隊員を批判しているのではなく、特攻隊員にそのような表情、言動を生ぜしめる戦争を批判しているのである。「桜島」は暗号員である「私」の視点より描いているのであるから、かくなる表現も決して不自然ではない。

だが、特攻隊の経験者にとっては、如何であろうか。「震洋艇」に乗る特攻隊員であった島尾敏雄は、終戦から間もない時期にこのような「桜島」の表現と接して、いささか納得できない気持ちで、大事な説明が欠落しているかのような不満を抱かされたのであるまいか。「出孤島記」は水上特攻隊長の視点から、「桜島」とは異なる表現を志向した側面を持つ。同作には描かれなかった部分を当事者の立場から描き、明るみに出した小説とも解釈できるのである。

例えば「出孤島記」では、「私」が隊長として派遣された孤島の基地に「百八十人」の隊員がおり、その総員の「四分の一ばかり」が「自殺艇乗組員」だと記す。「自殺艇乗組員」以外には、「整備員」や「本部要員」、つまり「医務員、通信員、烹炊員、経理員」が存

する。この中、「通信員」は、「桜島」でいう「暗号員」である。自
殺艇乗組員は「自分らがその任務に選ばれていることに特権の意識
を抱き、他の隊員との間に待遇の峻別を期待していた」。それ故に「本
部要員」らとの間に「一種の対立」が「ぶずぶずいぶり始め出して
もいた」。

島尾敏雄はこの小説で、水上特攻隊員以外の基地構成員に触れ、
しかも特攻隊員の他隊員に対する特権意識を明かしている。「桜島」
の「私」が特攻隊員に抱いた「嫌悪」の原因の一端が、このような
形で示されているのである。

また「出孤島記」の「私」は水上特攻隊の隊長として、「明けて
も暮れても或る命令を待ち、その対策ばかり、空しく胸算用で繰
返していた」。その結果として「神経衰弱に陥って」おり、「食欲が
減じ、顔色が蒼白くなって来た」。その「私」の相貌は、「桜島」に
描かれた水上特攻兵たちのそれと通じている。

島尾は自らの経験に拠りながら特攻隊員の心の内部にまで踏み込
み、彼らがなぜ「荒んだ表情」を見せるのか、その不健全で苦しい
精神状態を明るみに出しているのである。これまた「桜島」の「私」
が特攻隊員に抱いた「嫌悪」の原因について、詳しく深い部分から
説明を加えた表現と言えよう。

先に見た二つの場面、「桜島」の「見張所」と「出孤島記」の「番
兵塔」を改めて比較してみたい。²²⁾

「桜島」では、「私」が双眼鏡で百姓家を眺めながら、その百姓家
で先日起こった出来事について、見張役の「男」から説明を聞く。
お爺さんが首吊りをしようとするも、孫に目撃され留まった顛末を
「男」は語り、「残酷な、という気がした」と締めくくる。「私」は
その際に、「男」に「嫌悪を感じ」ている。

「出孤島記」においては、「私」が「一軒家」を望遠鏡で眺めてい
る際に米軍の編隊が現れ、「防空壕に逃げて行く」老夫婦の姿を目
にする。そして「彼等の、空襲を恐れあわてることの大げさなこと
が、私の心の傷を妙な具合に治癒して呉れた」、「一組の夫婦の爆
音におびえるその姿は、見ていて気持のよいものだ」と記す。

場面全体としては後者による前者の模倣を思わせながら、そこに
見るそれぞれの主人公の内面には、「嫌悪」と「気持のよいもの」
という、対照的な表現が為されているのである。

「桜島」の「私」が「男」の説明に「嫌悪」を感じたのは、「男」
が迫りつつあった自らの死を「滅亡の美しさ」と結び付け、無理に
でも納得しようとしていたからであった。「私」は「男」がグラマ
ムの機銃掃射を受けて命を落とした際、「滅亡が、なんで美しくあ
り得よう」と感じている。作者が「男」を批判しているかのよう
であるが、これまた水上特攻隊員への「嫌悪」と同様に、「男」をそ
のような心境に陥らせた戦争を批判しているのである。²³⁾

対して「出孤島記」では、「私」が夫婦者の慌てふためくような

姿を見て、なぜ「気持のよいもの」を感ずるのか、いま一つ分かりにくい。しかし、「心の傷」と記している通り、先に触れた「私」の「神経衰弱」とそれは密接に結びついている。

これら内面描写の相違にも、主人公および作者それぞれの海軍内における立場の違いが反映されていることに注意されたい。すなわち「桜島」における「私」の「嫌悪」には、自ら戦争に参加したのではない、国家から応召された下士官としての目線が表れている。一方「出孤島記」の「私」が抱える「心の傷」には、学徒士官、それも特攻隊長として、特攻戦を否定できない立場が関わっている。「私」は特攻戦について「誰かの命令に拘わり、その命令に忠実であろうとしていた」、「もうその他にどんな道も自分に許されていないように思い込んでいた」。そのことが不健全な精神状態により一層拍車を掛けていたのである。

ちなみに「出孤島記」の続編「出發は遂に訪れず」を見ると、八月十三日に下されるはずだった特攻隊発進の命令が結局は出ず、即時待機のまま十四日の朝を迎え、「私」は「私の死の完結が美しさを失う」と考えている。「桜島」の「私」とは正反対に、「出孤島記」の「私」は特攻戦による死を「滅亡の美しさ」と捉え、だからこそ遂行せねばならないと思いでいたのである。

梅崎春生は自分の意志とは無関係に徴兵された一国民として戦争を描いている。対して、島尾敏雄は自ら志願して戦争に身を投じた

一軍人の立場から表している。島尾が当時、戦争や軍隊を単純に肯定していたという意味では決してない。「出孤島記」には、特攻戦の「命令を出す者への疑い」や水上特攻の効果に対する疑念等も確かに書き込まれている。また「私」は学徒出身の士官として、自らの「性格」によって「隊風が出来上って」しまうこと、いわば隊長としての自分の適性、能力への不安も語り、この小説の思索的な傾向を深めている²⁶。その上でなお、梅崎と島尾では、前者の方が、厭戦をより直接表に出しやすい位置に存していたと見られるのである。いずれにしても、大戦末期の日本人が戦争に対して実際に如何なる心境を抱いていたのか、それぞれの立場、経験に基づいて表現していることに注目したい。

両作品の主人公が女性との関係を持つ場面についても補っておきたい。それらは戦時下における男性心理の一端を捉えた点で重なりつつも、やはり主人公および作者の立場の違いがそこには表れている。

「桜島」の「私」は、「目に見えぬ何物かが次第に輪を狭めて身体を締めつけて来る」のを「痛いほど感じ」、「歯ぎしりするような気持で」「連日遊び呆けた」。坊津郵便局の女事務員とは、そうした心境の中で「仲良くなった」。片耳の無い「妓」と一夜を過ごした際には、「私」は「俄かに憤怒に似た故知らぬ激しい感傷」を抱き、「青春を荒廃させ尽したまま、異土に死んで行かねばならぬ」運命にあることを痛感していた。つまり「私」は戦争で不本意な死を迎えね

ばならないことを自覚する中で女性との関係を持っている。「桜島」に登場する二人の女性は、「私」の戦争、軍部に対する、いわば被害者意識と強く結びついていたのである。

対して「出孤島記」の「私」は、Nとの逢瀬の際にも「自分が」居ない間にどんな事態が隊内で生じているかも分らない、「司令部から私に呼出しがかかっているかも分らない」、「新しい命令が来ているかも分らない」と考えてしまう。Nの顔を見ても心は癒されず、むしろ「隊に走り帰りたい気持ちでいっぱいになっていた」。つまり、「私」とNとの関係は、恋愛感情そのものを描くこと以上に、「私」の特攻隊長としての心情をより深める役割を果している。「私」は自ら志願して戦争に身を投じた特攻隊長として、如何なる時にもその責務から自由になることはできなかったのである。

さらに「桜島」の物語中盤に目を向けたい。大島見張所から「敵船団三千隻見ユ」との「作戦特別緊急電報」が届く。「此の部隊にも、先列佐鎮から、即時待機の命令が出た。今頃は、整備兵らが起されて、仕事にかかっている筈である」。だが、実際は「敵船団」でなく、見張所が「夜光虫」を見誤っただけであった。

桜島は水上特攻基地である故に、ここで「整備兵ら」が取り組んでいるのは、「回天」「震洋」という特攻艇の「整備」と言える。従ってこの晩、桜島基地では、特攻隊員らが直ちに発進できるように準備を進め、緊張を強いられた特別な時間を迎えていたはずである。

しかし、そうした特攻隊員の姿は、この小説では何故か一切登場しない。代わりに実際は「夜光虫」であることを知った「私」が「すべては茶番に過ぎない」と感じ、「苦い笑い」を「生理的な発作のように」浮かべている。この場面においても、梅崎春生の国家、軍部への批判的な視線が表れていると言えよう。そして島尾敏雄から見れば、このような特攻隊に目を瞑るごとき「桜島」の表現は、やはり受け入れがたく思われたのではないだろうか。そのことを念頭に置きながら、今度は「出孤島記」の物語終盤を見てみたい。

八月十三日夕方、「私」は特攻戦発動の命令を受け取る。士官室で自殺艇に乗り込む準備をする「私」の心境が次のように描かれている。

私は部屋の中で死装束をつけた。つまり自殺艇に乗込む為の服装になった。此のぺん限りの時の為に、いつもおさらいをしていた順序で、ふだんの略服の上に、飛行服をかぶった。私はその時に、袖やズボンに手足がうまくはいらないようなことになることをどんなに怖れたろう。然しそれも、どうやら右左を間違えずに着けることが出来た。ただふと気持が内に向くあの自分の体臭をしみじみと嗅ぐ気分の中で、もうこの服も脱ぐことはないのだという、ひとりぼっちにされた寂しさを感じた。(中略)力が手足から抜けてしまっ、しびれたようにぐったりとなっている自分の肉体を感じながら、然し次第にいつも

の時の平常な気持を取戻しつつあることを喜んだ。誰の為に喜んだのかは知らないけれど。

「自殺艇乗組員たち」は「整備隊員」らの協力で、艇の「整備」を進めた。だが、発進の命令は出されないまま、八月十四日の朝を迎える。「私」は「身体のみずみずみ解けて伸びやかになり、充実した肉体が、今日も未だ自分のものであったことに、しびれるほどの安堵の中に浸っていることを感じていた」。同時に「虚脱したような空虚な感じ」も抱いていた。

待ち続けた死の時を遂に迎え、それまでイメージしてきた自分の姿と今の自分を重ねながら、できる限り冷静であろうとする「私」の心境が、特攻服を着用する過程に託して具体化されている。覚悟を決めた死が結局は訪れず、「安堵」する思いと同時に、空虚感にも襲われるという、当事者のみが知り得る複雑な心情も確認される。特攻戦を果して「誰の為に」遂行するのか、実は理解できぬままであった、その心の裡の疑問もそれとなく記されている。

「桜島」で「即時待機」の指示が出された際にも、このような特攻隊員の姿が実際には存在していたはずである。「出孤島記」は、「桜島」では見えない部分をかくのこくと表出しているのである。

おわりに

島尾敏雄は安岡章太郎との対談「怯えについて」（昭和四十七年

四月『芸芸』）で、自らの戦争体験と創作の関わりについて、次のように語っている。

（前略）自分が将校の体験しかなかったわけだね、戦争のときの体験に取材して小説を書く場合に、非常に忸怩たるものがあるね。はたして小説になり得るかどうかというね。だけれどもそれと同時に、今度はまた、将校でなくて下士官であった人たちが、まったくそれに寄りかかって、それはもう片言隻句というか、咳ひとつしても小説になるんだな、なるように思うんだ、ぼくは。それをまた、そのまま気安く書いていると反撥もあるんだけれどもね。

島尾敏雄は自らの将校（士官）体験に比して、下士官の経験は小説になりやすいと考えていた。右に見る「下士官であった人たち」の一人が梅崎春生であり、「それに寄りかかって」書いた小説として「桜島」が挙げられる。

つまり島尾敏雄は「出孤島記」の執筆に臨んで、自分と同じ「島」での海軍経験を持つ先輩作家として梅崎春生に注目し、「桜島」と類似した舞台設定を選びながらも、「出孤島記」の方が「桜島」より小説化には困難が伴うと感じていたわけである。

先にも見た通り「桜島」と「出孤島記」では、それぞれ作者の海軍内における立場を主人公に反映させた結果、国家、軍部、戦争に対する主人公の姿勢は対照的となった。実際にどちらが創作困難で

あったか確かめようもないが、「桜島」と大きく異なる「出孤島記」の内面描写には、島尾の苦心の跡が表れている。

島尾敏雄における「将校の体験」は「水上特攻隊長の体験」に他ならない。だからこそ小説化は難しく思えた部分もあろう。対して梅崎は「下士官」でも通信科の所属であった。「桜島」は水上特攻基地を舞台にしながらも、特攻隊員について殆ど目を瞑り、むしろ批判的にも思えるような見解を主人公に語らせている。島尾にとって「桜島」のそのような側面は、「通信科の下士官」が如何にも「気安く書いている」ように見え、「反撥」させられたに違いあるまい。

かくて島尾敏雄は、梅崎春生の「桜島」に共感と反撥が相半ばした感情を抱きつつ「出孤島記」を著したと言い得る。全てが意図的であったとは認め難いものの、無意識の表現も含めて「出孤島記」には、水上特攻隊の描写を巡って「桜島」に対するある種のアンチテーゼが提示されている。島尾は元水上特攻隊長という当事者の立場から、梅崎が描き得なかった「桜島」の奥に存する世界、特に特攻隊員の内面を詳細に描いてみせたのである。

「桜島」と「出孤島記」は戦争小説として、互いに合わせ鏡のごとき表現を見せている。両作品を併せて読み解いていく必要性を強調したい。それぞれの物語の裏側に触れ、より深い作品理解が可能となるからである。

島尾敏雄は「出孤島記」発表から約一年後、先にも触れた長編

『贗学生』を書いた。その約六年後、梅崎春生は松平家御曹子の「ニセモノ」を主人公に据えた長編「つむじ風」（昭和三十一年三月二十三日）十一月十八日『東京新聞』を連載した。「つむじ風」には、『贗学生』を彷彿させる表現がいくつも認められる。島尾から梅崎へ及ぼした影響を窺わせるが、その考察は後の機会に俟ちたい。

注

- (1) 梅崎春生は大正四年二月十五日生れ。「ボロ家の春秋」（昭和二十九年八月）『新潮』で第三十二回直木賞、「砂時計」（昭和二十九年八月）『新潮』で第二回新潮賞、「狂い風」（昭和三十八年一月）『群像』で第十四回芸術選奨文部大臣賞、「幻化」（昭和四十年六月、八月）『新潮』で第十九回毎日出版文化賞を得た。昭和四十年七月十九日没。島尾敏雄は大正六年四月十八日生れ。「出孤島記」（昭和二十四年十一月）『文芸』で第一回戦後文学賞、短編集『死の棘』（昭和三十五年十月、講談社）で第十一回芸術選奨文部大臣賞、「硝子障子のシルエット」（昭和四十七年二月、創樹社）で第二十六回毎日出版文化賞、「日の移ろい」（昭和五十一年十一月、中央公論社）で第十三回谷崎潤一郎賞、長編『死の棘』（昭和五十二年九月、新潮社）で第二十九回読売文学賞および第十回日本文学賞、「湾内の入江で」（昭和五十七年三月）『新潮』で第十回川端康成文学賞、「魚雷艇学生」（昭和六十年八月、新潮社）で第三十八回野間文芸賞を得た。昭和六十一年十一月十二日没。古林尚作成『梅崎春生年譜』（『梅崎春生全集第七卷』昭和四十二年十一月、新潮社）、島尾ミホ・志村有弘編『島尾敏雄事典』（平成十二年七月、勉誠出版）参照。

(2) 同論ではその「近似した印象」について、以下のごとく論じている。「梅

崎春生の小説は対象とした世界はそれなりのかかなりの確な表現で描き出されているのだが、それを見ている作者の眼はひどくそれらに対して冷淡であり、決してその中には入って行かないし、それと感動をともにすることがない。そうした生命への冷淡さと無関心が残酷な人生の断面をさりげなく提出してゆくのだが、島尾氏の初期作品にもそれがあつた。

(3) 古林尚作成「梅崎春生年譜」参照。

(4) 梅崎春生はエッセイ「八年振り」に訪ねる「桜島」(初出紙未詳、昭和三十七年十月一日)で、小説「桜島」(昭和二十一年九月『素直』)において「吉良兵曹長も見張りの兵隊も耳のない妓も、皆私がつくった」と書いている。

(5) 助川徳是作成「島尾敏雄年譜」(鑑賞日本現代文学29島尾敏雄・庄野潤三)昭和五十八年十月、角川書店 参照。

(6) 「桜島」は大正三年の桜島岳噴火で一部陸続きとなり、正確には島でないが、多くを海で囲われた島に似た状況にあり、小説「桜島」では実際に「島」と称されている。

(7) 山本健吉「梅崎春生について」(『新選現代日本文学全集28梅崎春生集』昭和三十四年十月、筑摩書房)、川村湊「解説―隣人と死―」(『桜島・日の果て・幻化』平成元年六月、講談社文芸文庫)、開高健「紙の中の戦争」(連載第二十回)―島尾敏雄『出孤島記の場合』―(昭和四十六年二月『文学界』)、奥野健男「解説」(『出孤島記 島尾敏雄戦争小説集』昭和四十九年八月、冬樹社) 参照。

(8) 同論では、その「戦争を主題にしたいわば私小説」として藤枝静男の中編「イペリット眼」(昭和二十四年三月『近代文学』)も挙げ、「桜島」「出孤島記」「出発は遂に訪れず」と併せた計四作について、以下のように論じている。「これらの作品に共通するのは、作者のモチーフが戦争や軍隊やの内面暴露にあるよりむしろそういう舞台をあたえられて登場する

主人公の『わたし』の内部描写に傾斜するところであり、そしてそういう方法を押しとおすことにより作品全体が結果的には戦争や軍隊の隠された内部をひとつの視野から浮き上がらせる役目を果たしている点にある。」

(9) 梅崎春生の死後、昭和四十一年五月に鹿児島県杵津に建立された梅崎春生「幻化」文学碑の除幕式に島尾敏雄は出席している(『西日本文学碑の旅』昭和六十年四月、西日本新聞社)。しかし、これは島尾と梅崎が親密な関係だったからでなく、当時島尾が奄美大島名瀬市に在住していた故に、鹿児島県内の著名作家として招待されたと思われるであろう。

(10) 古林尚作成「梅崎春生年譜」、助川徳是作成「島尾敏雄年譜」、島尾ミホ・志村有弘編『島尾敏雄事典』参照。

(11) 「唐草」では「彼の持病の発作」として、次のように描いている。「それに彼は眼華という名前をつける。(中略) 視界の、というより視覚の斜の上のあたりで盲点の部分がふわっと現われる。(中略) それが次第に生きもののくらげのような活動をはじめる。(中略) やがてくらは共は消え去って、一つの歯車の中に吸収されてしまう。(中略) それがちかちか視覚の片隅で廻り始める。次第にその弧の長さが増して来て完全な円を作ろうとする。その為に彼は自分の顔に、火花のように明滅する円光をかぶったふうになって、花やかな世界の中に立つ。」

(12) 島尾敏雄・小川国夫『夢と現実―六日間の対話』(昭和五十一年十二月、筑摩書房)。なお島尾敏雄は「魚雷艇学生」でも「眼華」という言葉があるのかどうかはあやふやだけれど、何かの書物で読んでいてその言葉をつけたのだ」と書いている。

(13) 植村恭夫編『ベッドサイドの眼科学』(昭和五十三年十月、南山堂) 参照。
(14) 梅崎春生の長編「幻燈の街」(昭和二十七年四月)九月『中国新聞』他では、主人公久我丈助が「今でも疲れてくると、臉の裡に、チカチカしたもの

が、火花のように飛ぶんです」と語り、丈助が「目を閉じ」た際には「く
らげのようなものが臉のうちに揺れ始める」とも記している。

(15) 夏目漱石「函山雜詠」には「眼花凝似珂」、杜甫「飲中八仙歌」(七四六年頃)には「眼花落井水底眠」、島崎藤村「夜明け前」(昭和七年四月～十年十月)中央公論)、「第二部・下」には「閃き発する金色な眼花の光彩は、あたかも空際を縫って通る火花のように、また彼の前に入り乱れた」と記されている。引用は『夏目漱石全集第十四卷』(昭和十一年九月、漱石全集刊行会)、黒川洋一校注『中国詩人選集第十卷・杜甫・下』(昭和三十四年三月、岩波書店、島崎藤村『夜明け前・第二部・下』(平成二十四年六月、新潮文庫)に拠った。

(16) 同書の「五言之部」における無題詩の中に「眼華終日飛」との句が見られる。谷川敏朗校注『良寛全詩集』(平成十年五月、春秋社)にも同じ詩が掲載されている。なお谷川の解説によれば、題は「無常迅速」で、「五合庵期(寛政九年～文化十三年頃)」の作。

(17) 「アスファルトと蜘蛛の子ら」では、将校らしい軍人の「私」が「降伏停戦の前の日」に憲兵将校から尋問され、「引續返って痴呆状態になる」という液体を飲まされる。「私」は「何の効き目も感じられな」かったが、「此の場をうまく擬態すれば彼は引揚げてしまうのではないか」と考え、「うしろにでんぐり返ってやった」。

(18) 梅崎春生は短編「生活」(昭和二十四年一月「個性」)で、四十代で召集された老兵たちは「息子ほどの年頃の兵長によろしやなく尻を打たれたり」する中で、「総じて無表情になる」が、それは「流体がおのずと抵抗のすくない流線型をとるよ」うな、軍隊で生き抜くための「擬態」だと書いている。また「鷹の季節」(昭和二十二年十一月「日本小説」)では、解散直前の曲馬団を舞台としつつ、「皆目自信をなくしている」団員たちを「偽者」と称している。島尾敏雄は「兆」(昭和二十七年七月「新日

本文学」)、「子之吉の舌」(昭和二十八年十月「文学界」)、「反芻」(昭和二十九年五月「群像」)の各短編でも「擬態」との表現を用い、『鷹学生』(昭和二十五年十二月書き下ろし、河出書房)では、「にせもの」の医学生である木乃伊之吉を主人公に据えている。

(19) 本多秋五「物語戦後文学史」(昭和四十一年三月、新潮社、西尾宣明「島尾敏雄文芸の文芸史的位置に関する一考察」(昭和六十一年一月「人文論究」)参照。

(20) 島尾敏雄は梅崎春生「砂時計」について、「特定の主人公を設定」せず「沢山の人々が環境やおたがいの関係の中で演じ合う卑小さ」を「洞察的に描き、読者の「笑いを誘う」一方、中心人物の栗山佐介に「深く沿って」読み込んでいくと、「佐介が出てくる場面」以外は「つくりもの染み」で見え、「笑わせようとしている手付に白々となる」と書いている(書評「梅崎春生著『砂時計』」、昭和三十年十一月十五日「図書新聞」)。

(21) 古林尚作成「梅崎春生年譜」参照。

(22) 助川徳是作成「島尾敏雄年譜」参照。

(23) 梅崎春生の「桜島」(昭和二十一年九月「素直」)が発表された前後の時期、元特攻隊員による犯罪等が横行し、世間には「特攻くずれ」との見方が広まっていた(福岡良明「殉国と反逆―「特攻」の語りの戦後史―」(平成十九年七月、青弓社)、栗原俊雄「特攻―戦争と日本人―」(平成二十七年八月、中公新書)参照)。「桜島」において、特攻隊員に対する批判的にも思えるような視線は、このような時代背景から捉え直す必要もあろう。

(24) 多田蔵人は「出孤島記」の番兵塔の場面について、「当時広く読まれたバルビュス「地獄」の窃視や梅崎春生「桜島」(昭和21・9「素直」)の一節を思わせる箇所」だと指摘している。加えて「出孤島記」の昭和二十四年十一月「文芸」初出稿では「Nの挿話が、主人公の軍人としての像を、

『私』自身をこえて補強していた」ことを踏まえつつ、『桜島』の暗号兵が住民を眺めて心を慰めているのに対し、『出孤島記』の士官は防空壕に逃げこむ夫婦を見ると『その防空壕に、私はNと一緒にはいった』という経験の思い起こしてしまふ』設定に注目する。「眺める『私』と眺められた住民とを結びつけるNの姿は、集落にあって決して部隊とは別の存在ではありえない『私』の像を指し示す」と論ずる（『出孤島記』論、令和二年五月『国語と国文学』）。「出孤島記」全体から捉えた場合、「Nの姿」と『私』の像」に関わる多田の分析は適切であり、本論とも一部重なる見解と言える。しかし『桜島』の暗号兵」の心境に対する説明は不正確である。「桜島」の「私」は見張所から望んだ「炎天の風景」に「心の底まで明るく」されているものの、「住民を眺めて心を慰めて」はいない。また多田論は、「出孤島記」の「私」が空襲におびえる夫婦者の姿から「心の傷」を「治癒」され、「気持のよいもの」を感じたことについて触れていない。本論では、「桜島」の見張所と「出孤島記」の番兵塔を対比させるに当たって、両作品の主人公の内面を対照的と捉え、以下の本文に見る通り考察を進めた。

(25) 拙著『梅崎春生研究―戦争・偽者・戦後社会』（平成三十年一月、和泉書院）第二章第一節『桜島』論―戦争批判と自然美―参照。

(26) 「出孤島記」発表より約二年前、東大学生自治会戦没学生手記編集委員会編『はるかなる山河に―東大戦没学生の手記』（昭和二十二年十二月、東大協同組合出版部）が、同じく一箇月前、日本戦没学生手記編集委員会編『きけわたつみのこえ―日本戦没学生の手記』（昭和二十四年十月、東大協同組合出版部）が刊行された。どちらも特攻隊員を中心に戦没学徒兵の思索的な手記を多数掲載し、前者は七万部、後者は二十数万部の売り上げを記録した（塩澤実信『定本ベストセラー―昭和史』（平成十四年七月、展望社）参照）。島尾敏雄がこれら二冊から影響を受けていたとは

思えない。しかし「出孤島記」は、学徒出身の水の特攻隊長「私」の思索的な語り貫かれている。当時の読者にとっては、ともに広く読まれた二つの戦没学生手記とイメージを重ねる作品でもあったと言えよう。

*梅崎春生の作品引用は『梅崎春生全集』全七巻（昭和四十一年十月）四十二年十一月、新潮社）及び『幻燈の街』（平成二十六年五月、木鶏書房）、島尾敏雄の作品引用は『島尾敏雄全集』全十七巻（昭和五十五年五月）五十八年一月、晶文社）及び『魚雷艇学生』（昭和六十年八月、新潮社）に拠った。対談「怯えについて」は『内にむかう旅 島尾敏雄対談集』（昭和五十一年十一月、泰流社）より引用した。引用文中、旧字体は新字体に改めた。傍点は私に付した。

―たかぎ・のぶゆき、別府大学教授―